

今年度、館長が交代し、また国際交流員も交代となり、前任のロバート・テルシッグが7月を以て退職、8月から新たにリリ・ブシュミンがドイツ館にやって来ました。そして新設の学芸員のポストに長谷川純子が着任しました。以下に4人からのご挨拶を掲載いたします。

新館長着任あいさつ

森 清 治



本年4月の定期異動によりドイツ館勤務となりました森清治です。3月まで市教育委員会で生涯学習関係の業務を担当し、20年近く文化財保護行政に携わってまいりました。教育委員会在職中には、大正時代「日独戦争」で捕虜となったドイツ兵が暮らした国内で唯一跡地が残る「板東俘虜収容所」跡の発掘調査などを担当してまいりました。収容所跡の発掘調査では、ドイツ兵が当時製作した収容所内の測量図を基に、現在地表に痕跡を残さない建物の場所を特定しながら進めましたが、約100年前の測量図が非常に正確で、図に描かれた場所に建物が残っていることに感動したことを憶えています。

現在、本市と徳島県が共同で作業を進めているユネスコ「世界の記憶」への登録に向けた取り組みについては、ご存じの方も多と思います。この取り組みは、「板東俘虜収容所」内でドイツ兵が記録した「板東俘虜収容所新聞」などの文字資料と写真などの映像資料を、世界的に重要な記録物としてユネスコの認定・登録を受けようとするものです。

鳴門市ドイツ館には、大正時代に日本とドイツが戦争の壁を乗り越え互いを尊重しあった歴史的交流により、ドイツ兵の活動をドイツ兵自らが「記録」した印刷物や写真などが製作され、

多くの「記録物」が当時の「良き思い出」として寄付されています。今後は、この資料が鳴門市だけでなく世界の「良き思い出」となるよう「世界の記憶」に向けた取り組みを進めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

学芸員着任あいさつ

長谷川 純 子



2016年7月から、鳴門市ドイツ館の学芸員として着任致しました長谷川純子です。この度、鳴門市ドイツ館で仕事をさせて頂けることを大変有難く光栄に思っております。

出身は大阪府吹田市で、京都市立芸術大学を卒業後、イタリアで約3年間、文化財保存修復

について学びました。博士論文ではイタリア・ルネサンス期の額縁について論じ、スイス、ジュネーブ大学大学院で約3年、西洋美術史の研究を行い、帰国後は、奈良で文化財の保存処理や保存管理の仕事に携わって参りました。

残念ながらこれまでドイツに関わることは少なかったのですが、イタリアでは多くのドイツ人の友人ができ今でも親交が続いており、ドイツに対してとても親近感があります。

趣味は、寺社仏閣、教会等、歴史的建造物を訪れることです。そこには地域に根付き守られてきた絵画など文化財があり、それが持つ空気感を感じるのが好きです。イタリアやフランスでは、レンタカーを借り山間部の歴史ある小さな教会巡りをした良い思い出があります。

着任から約二ヶ月弱、まだ仕事は慣れない部分も多く、皆さまのご指導を仰いでおりますが、最善を尽くし努力して頑張りたいと思います。今後はドイツ館の貴重な資料の保存管理を行いながら、当時の時代背景、世界の情勢、国の政策、鳴門やそ

他に収容所があった地の状況やドイツ語を学び、専門である文化財保存修復や美術史的視点から、ドイツ館の資料研究を行っていきたくと考えております。国際博物館会議ICOMなどにも参加し、世界の研究者とも共に今後の資料館の課題やあり方についても考えていければと思っています。ドイツ館資料のユネスコ「世界の記憶」の登録に関しては、申請のため、多くの専門家の方々の意見を伺い、着実に登録に向けて仕事を進めていきたいと考えております。これを機とし、広く世界にも鳴門市の貴重な遺産を紹介し、国内に限らず海外からも人を集め、更には世界平和にも貢献できれば幸いです。

「板東俘虜収容所」での出来事がどういったものであったか、今後どのように活かせるかを考え、鳴門市と世界の未来に平和の願いを繋げていく仕事の一助を担いたいと考えております。

どうぞ今後ともご指導とご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。

国際交流員退任の挨拶

ロバート・テルシグ

「光陰、矢の如し」

2011年の春に、国際交流員として鳴門に派遣されることになるというニュースを聞いたら、最初は一体どこなのかよく分かりませんでした。しかし、その5年後、ここに働きに来られてよかったと思います。この街は第二の故郷になり、この鳴門で過ごしたことは永遠に忘れることがないだろうと思うようになりました。

実際、鳴門に来た最初のときは少し心配でした。なぜなら、前任者のドイツ人国際交流員は素晴らしい方であり、幅広い交流を行ったからです。ドイツでの里帰り公演をはじめ、「バルトの楽園」という映画の撮影、『どこにしようと、そこがドイツだ』という入門書のドイツ語訳まで行っており、私にはこんなことはできないだろうと思いました。

しかし、振り返ってみると、この5年間があっという間に終



わったように思います。期間中、さまざまな事業や交流プロジェクトを担当・サポートすることができました。1年目のときに一番印象的だったのはやはり当時のドイツ大統領の来鳴でした。2年目のときに、初めてリュネブルク市の使節団と関わって、姉妹都市交流がこんなに活発なのか改めて実感しました。3年目には、経験によって業務がよりスムーズになり、青少年派遣事業のために頑張りました。4年目は、『敵が友になるとき』のドキュメンタリー映画の日本語字幕作成や姉妹都市交流40周年で忙しくなりました。そして、5年目は、「第九」初演100周年に向けて、ドイツでの板東俘虜収容所に関する企画展の準備やユネスコ「世界の記憶」登録申請事業で任期終了まで忙しい日が続きました。

こうした経験や思い出を振り返ると、自分の足跡がここ少しでも残るかもしれないと思います。これからは鳴門を離れ、ドイツに戻る予定ですが、またいつか必ずこの鳴門に戻ります。その再会できることは既に楽しみにしています。

5年間、鳴門の皆様から温かい支援をいただき、心から感謝したいと思います。

アウフ・ヴィーダーゼーン（さようなら）！

新国際交流員着任の挨拶

リリ・ブシュミン

皆様、「Es freut mich Sie kennenzulernen! (はじめまして)」ドイツから参りましたリリ・ブシュミンです。この度、国際交流員として鳴門市で仕事をさせていただくことになりました。読者の皆様の中には、なぜ母国を出て、家族から遠く離れた国に住むことにしたのかと驚く方もい

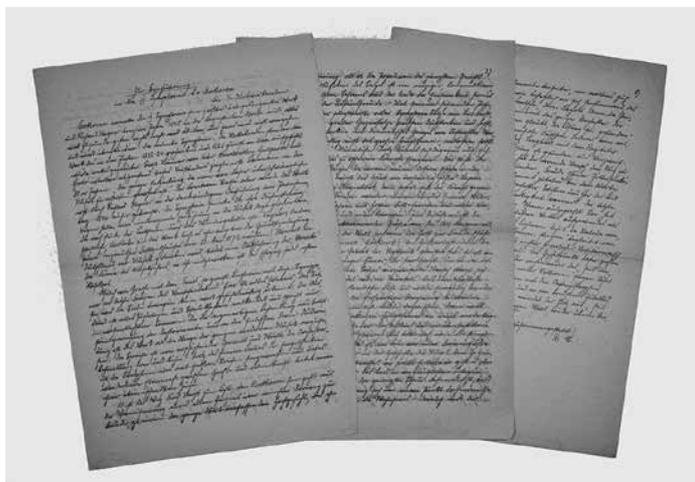


らっしゃるかもしれません。日本のことに興味を持ち始めたのは、ギムナジウム（ドイツの中学校・高等学校）に入った頃でした。その時は、歴史の授業が大好きで、歴史学の先生になりたいという希望もありました。しかし、西洋の歴史だけでは不十分に感じ、もっと知りたいと思っていたときに、アニメを通じて知った日本の文化に興味を持ち始めるようになりました。日本の文化には、惹かれるところが多いのですが、特に日本の方が発言する前に、相手の気持ちをよく考えることや、食材の品質への関心が高いことにとっても感動いたしました。

このような様々な考えがあり、高校を卒業してからドイツの大学に入学し、日本史と西洋史を専攻することにしました。学生時代に長野県松本市の信州大学で留学生として日本に住んでいたことがあり、それ以来日本に対する関心が深まり、また日本で生活したいと思うようになりました。そして、今年の5月に大学院を修了し、すぐに鳴門に参りました。自分の専門に近い日独の歴史に関わるドイツ館で就職ができて、とてもありがたく思っています。まだ分からないことが多いのですが、いろいろ勉強しながら、頑張りたいと思います。現在、一生懸命板東俘虜収容所について学んでいるところですが、収容所内では音楽やスポーツ活動が盛んに行われたことだけではなく、住民との交流も捕虜の心の支えになったのが少しずつ分かってきました。戦争という辛いものから日独の友情が生まれ、今も続いていることに感動いたしました。私はニーダーザクセン州で育ちましたので、州内にあるリューネブルクという姉妹都市との交流にとっても関心があります。その他にも、ドイツ語講座、またイベントの企画などお手伝いすることができると大変嬉しく思います。まだ鳴門市に来て一ヶ月ですが、鳴門の花火大会に行ったり、渦潮を観に行ったり、阿波踊りにも参加し、もう様々な楽しい思い出ができました。日本の方にドイツの文化を伝えるだけではなく、ドイツに帰ってから、このような美しく日本らしいところについて、ドイツの方に伝えられるようになりたいと思います。これからお互いに交流しながら、視野を広げましょう！よろしくお願いたします。

収蔵品紹介

新発見の「第九」関係資料



現在、鳴門市では2018年の「第九」アジア初演百周年に向けて種々の取組みと企画が展開しているところです。今号ではそれにちなみ、実際にはまだ収蔵品ではないのですが、その予定となっている新発見の資料の紹介をします。

それは写真に見るように、3葉5ページの謄写版刷の紙資料で、判型は395×276mm（A3を一回り小さくしたサイズ）、ドイツ・日本研究所が所蔵する「TTB」（日刊電報通信）と同じ紙質・判型です。標題には「Zur Einführung in die IX. Symphonie L.v.Beethoven Für die Mitwirkenden」（L.v.ベートーヴェンの第九交響曲解説 共演者のために）とあり、「第九」の演奏参加者に配布された資料と推察されます。従来、「第九」関連の文字資料としては板東俘虜収容所新聞『ディ・バラック』第2巻第10号中の「ベートーヴェンの第九交響曲について（シラー ベートーヴェン ゲーテ）」と題する記事（執筆者はP.Sq.=ヘルマン・ポナー）および『ベートーヴェンの第九交響曲』という楽曲解説冊子が知られていましたが、これはそれらとは全く別物であり、末尾には執筆者としてR.M.というイニシャルが記されています。R.M.は『ディ・バラック』の記事の執筆者として頻繁に出る名前であり、何回か徳島オーケストラの音楽会に対する批評も書いています。

その内容ですが、最初の1ページが「第九」そのものについての概説、残りが各楽章に対する楽曲解説となっています。概説部分を要約すると、最初に「第九」が1825年に初演された当時、同時代人には受け入れられず、少し後になってシューマンが理解を示すようになり、1846にワーグナーが再演することによって復活を果したこと、今ではドイツ各地の音楽年の頂点をなすものとなっていること、その演奏に加わることが音楽家にとって名誉なものであると書かれています。ついでゲーテが『ファウスト』で取上げたものと同じく、ベートーヴェンはこの交響曲によって人生の究極の問題に向かい、魂を揺り動かす最奥のものを感覚的に理解できる体験がそこにはあると述べます。ベートーヴェンがここで歩む道は闇から光への道であり、高貴な心の孤独から何度も迷いつつ喜びへといたる道であり、彼と被造物を天上の父とを結び合わせる全世界を包込む高揚感への道である、と書いています。

「第九」といえば、現在では人類愛を歌い上げるものとの解釈が一般的ですが、この解説ではまったく違った解釈をしていて興味深いので、拙い抄訳ですが紹介してみました。

来館者の紹介

松江所長の弟・春次氏の孫らドイツ館等を調査訪問

板東俘虜収容所長・松江豊寿氏の弟の松江春次氏の孫にあたる佐伯圭一郎氏と関係者3人が、4月7日、ドイツ館を訪れ松江豊寿氏の足跡をたどりました。

この訪問は、第二次世界大戦前のサイパン島で精糖事業を成

功させシュガーキングと呼ばれた松江春次氏の偉業を周知し、豊かで平和な社会の創造に寄与することなどを目的に1997年に設立された「シュガーキング基金」の一環事業として行われました。一行には同基金代表の佐伯氏のほか、昭和21年1月までサイパンで暮らした会津の語り部・菅野栄子さんと、画家の関堂圭子さん、同基金のアドバイザー・隅田信さんが同行。ドイツ館見学はもとより同収容所跡地やドイツ橋などを訪問し、松江豊寿所長の収容所運営の影響や成果を質問したり、カメラに収めたりしていました。関堂さんは滞在を延長し、ドイツ館やドイツ橋など、印象に残った場所を水彩画でキャンバスに描いていました。

シンポジウム開催のお知らせ

板東俘虜収容所で作成された印刷資料と写真などをユネスコの「世界の記憶」への登録を目指して、各種分野の専門家を委員とする調査検討委員会がすでに2回開催されています。その中で以下のようなシンポジウムが10月15日（土）に徳島大学で開催されることになりました。

これに合わせてドイツ館では10月15、16日の両日「板東俘虜収容所の記憶1917～1920」展が開催されます。

「板東俘虜収容所関係資料」

ユネスコ「世界の記憶」登録推進シンポジウム

日時 平成28年10月15日（土）13:50～

場所 徳島大学 常三島キャンパス

けやきホール大ホール（総合科学部2号館2階）

入場 無料

報告 「板東俘虜収容所関係資料」について

徳島大学名誉教授 前鳴門市ドイツ館館長 川上 三郎

講演 世紀を超えた「和解」の記録

九州大学名誉教授 福岡市博物館館長 有馬 学

パネルディスカッション

コーディネーター 有馬 学

パネラー 川上 三郎

鳴門市日独友好協会会長 村澤由利子

徳島経済研究所専務理事 田村 耕一

リューネブルク博物館館長 ハイケ・デュッセルダー

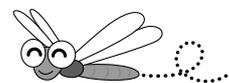
（敬称略）

ドイツ館のこれまでの主な行事

- 4月16日 リーベストロイメ（音楽会）
- 4月9日～5月8日 鳴門百景
- 5月3日～5月5日 フリューリングスフェスト
- 5月27日～6月5日 第九展
- 6月11、12日 ドイツ館の鉄道会
- 6月11日～6月30日 鉄道写真展
- 7月2日 セタコンサート
- 7月18日 フルートとピアノドイツの調べ
- 7月10日～8月31日 ドイツ館収蔵写真展
- 7月30日 第九の里コンサート
- 7月31日 道の駅10周年イベント
- 8月13、14日 ドイツチェスホフフェンフェスト
- 8月20日 うたってスマイル
～おんがくってたのしいね～

これからの主な行事

- 9月24、25日 ドイツグルメッセ
- 10月1日～10月31日 鳴門日独美術協会
- 10月8日～11月27日 奥山実秋絵画展
- 10月10日 トリア合同演奏会
- 10月15、16日 「板東俘虜収容所の記憶1917～1920」展
- 10月24日 ドイツチェスフェスト in なると
- 10月30日 ファゴット・チェロドイツ人演奏会
- 11月3日 冬の旅 バリトンリサイタル
- 12月17、18日 ドイツ館のクリスマス



編集後記

今夏も異常に暑い日が続いていますが、このところドイツ館周辺では群れ飛ぶ赤トンボを見かけるようになりまし
た。早くも山から下りてきているようで、数日来の涼しい
日とともに秋の訪れを予感させています。

編集子は3月末の館長退職と同時に別の人にバトンタッ
チする予定だったのですが、諸般の事情により引続き編集
に携ることとなりました。